

# 魅力ある語学教育への課題研究

— 「教える授業」から「学び広げる授業」へ —

山 田 隆 敏\*

A Study of a characteristic Language Education (English) and its Curriculum

— From Teaching to Learning —

Takatoshi YAMADA

## 要 旨

大学の英語教育における学習者のニーズについて調査分析を試みた。急速に変貌する社会環境と、小・中・高における「総合学習の時間」の設置と「小学校英会話」指導における問題提起など、従来の学習環境では学習者の志向を見誤る危険性が散見される。そこで高等教育機関における学習者の授業に対する目的／意義／その必要性／その問題点等を追求し、新しい教育体系の構築に向けての指針をこころみた。

本稿の目的は、そこで提起された本学の学生ニーズを明確に分析し、新しいカリキュラム作成を結実させる資料提起にある。なおこの結実は、平成13年9月から平成14年3月まで10数回議論推考をかさねた教養部「英語教育将来検討委員会」にて「奈良大学／英語教育新カリキュラム案」という形で学内外に公示された。なおこの案は、「全学カリキュラム検討委員会」にて了承された。この委員会案は、本稿のアンケート調査の問題点と課題を考慮して山田が作成した私案に添うものである。

## I はじめに

21世紀になり、大学の英語教育も新しい時代を迎えている。英語自体は世界の共通語としてその地歩を固めつつある。英語は明らかにIT化時代・情報化時代の根幹を担いつつある。「国際化・情報化」の時代に存在するからこそ、確実に英語がコミュニケーションの媒介言語になりつつあることは紛れもない現実的事実である。最新の情報機器の発達によって、または英語の場合のLL機器からCALL機器への発達によって、あらゆる情報が瞬時にネットワークシステムを通じ一つに結ばれる。こういう高速情報時代の到来を英語教師のみならずどの分野の人も、誰一人想像できなかったのではなからうか。このような高速大量伝達社会の中で、我々教育者はどのような教育理念をもって、どのような英語をいかように教えるべきか。

外国語教育の分野では、最近の傾向として、学習者の動機づけ (Motivation) に焦点を当て、効果的な学習法を模索 (Learning Strategy) する試みがなされている。学習者の「自主的・自発的な学習」を促すことによって、言語表現能力がどれほど効果的に向上させられるかを追求し、その機会と手法と教材を最も最適な状況で提示すること：そのポジティブな教育者姿勢が、外国語教育に携わる担当者たちの課題になっている。このような外国語教育の現状に対する改革の試みとして、本学の外国語教育の実態を学生の面から分析し、その分析から生ずる結果を基にして、新しいカリキュラム提示と、それに基づく言語学習ストラテジーを追求してみる。

## Ⅱ 研究対象クラス (2 クラス)

①科目名：英語Ⅰ (総合英語・1回生) 52名——本編では「Ba」クラスと呼称する。

- ・テキスト=Frontier in Science (成美堂)
- ・このクラスの位置付け：週1回90分授業。1回生。CALL機器を月2回程度利用して ListeningとExpression能力の習得に焦点を当てつつ、グループ発表でプレゼンテーションの深化をめざす。
- ・学生バランス：男子28名。女子24名。

②科目名：英語Ⅲ (時事英語向・2回生以上) 37名——本編では「Bb」クラスと呼称する。

- ・テキスト=Listening and Self-Expression (南雲堂)
- ・このクラスの位置付け：週1回90分授業。2回生以上。CALL機器を月3回程度の頻度で使用。英語を通じて身の回りを、日本を、そして世界を観れるように、日頃から新聞、テレビニュース、そして本を精読するように義務付ける。学生それぞれの意見の創造 (構築=my own opinion) がコミュニケーションを通じての最大の武器であることを、学生に周知徹底させている。
- ・学生バランス：男子22名。女子15名。

## Ⅲ 研修対象クラスの担任からの分析

①Baクラス (1回生)

☆プラス面：(1) 学期当初、数名だが質問する学生がいた。徐々に引きずられ、学生の発表回数が増加した。

- (2) 真面目に演習にでて、真面目に聴きすぎる場合がある。
- (3) 出席率が良く、演習のあとで質問が多くでるようになってきた。
- (4) 女子学生は概ね意欲があり、熱意があり、そして声大きいのが、男子学生は全般的に温和しすぎて、概ね、声が低い。
- (5) 予習状態は概ね良好だが、もう一つ訴えるものに欠ける。

- ☆マイナス面：(1) 5～6年前に比べ、文法面・発音面で、その初歩すらマスターできていない学生がいる。
- (2) クラスのなかでも発表者・質問者が時折偏る場合がある。それは予習不足なのか、それとも体面を考えて質問しないのか。
- (3) プリントで少し高度な教材を出した場合、ついてこれる学生にバラツキが観られる。
- (4) 外国語クラスとしては52名は多すぎる。そのため学習ストラテジーの運用面で、柔軟的な対応が執れず、折角の内容に乱れが生じている。
- (5) 音読と会話の折、声を共に出す習慣がなく、まだまだ受験の弊害が感じられる。高校段階で音読する回数が少なく、文法中心の読解授業の影響が残っている。

## ②Bbクラス（2回生以上）

下記の内容については、Baクラスの現状と相似している場合が多い。そのために、ここでは異質な面だけを明示する。

- ☆プラス面：(1) このクラスは独・仏・中との選択必修クラスである。さらに自由選択の学生も含まれる。さらに、学生は2回生から4・5回生まで幅広く含まれる。この多様な選択学生の存在によって、このクラスは英語Ⅰ・Ⅱのクラスでは見られない雰囲気を漂わしている。この中で自由選択の学生は12人を数える。これが次の学生評価でのデータに大きな影響を与えている。
- (2) このクラスの4割は昨年の教え子である。さらに、3割は友人・クラブ生の紹介である。3割が、シラバスをみて選択した学生割合となっている。
- (3) 科目選択の理由が明確であり、目的意志がはっきりしていることはプラス面であろうか。しかしその目的意識も内容次第であり、学生の中には昨年のよしみで選択した学生も少なからずいる。学生の問題意識の希薄さに問題は内在する。
- (4) 昨年と同じ経験組とか、紹介組が中核となって、クラスをリードする。
- (5) 時事問題で英語を理解し、英語もしくは日本語でディベートできるように指導しているが、学生の反応は上々である。英語を通して社会をみる学習は、学生に客観的な視点で物を見るチャンスを与えたようである。
- (6) 学生の中には、外国語を除いた教養科目をすべて選択にしてほしい学生希望者が数人いたことは驚きのひとつである。その理由を後日一般的に問い掛けると、講義科目はただ単に卒業単位の取得手段にすぎない。講義科目4単位はとても有利であるとの後向き回答が帰ってきた。

- ☆マイナス面：(1) 私語もなく、真面目な学習態度は優れている。あくまで単位取得を目標にしているために、無気力な学生もいることは残念であり、どの大学に

も見られる最近の風潮である。

- (2) 学生数が37名と多くもないが、できればもっと少人数の方が効果的である。
- (3) 選択必修の学生間でも、選択必修と自由選択の学生間でも、男女間でも、予習段階の有無の間でも、さらにCALL機器の経験の多少の間においても、学生本人の主体性の差が顕著になっている。その顕著な例は、指示しなければ「何もしない、何もできない」受動的な若者像の姿である。目的意識を「持てない、持たない、そして持とうとしない」姿であり、この姿が個人の能力の進捗に大きくかかわっている。
- (4) 学生に機器の操作を教えている間に、または37台ボックス間のトラブルに追われている間に、時間を奪われてしまう。TA (Teaching Assistant of Graduate Students) の制度があれば、さらに操作機器が事前に万全であれば、効果は倍増する。

#### Ⅳ 大学の英語授業における学生実態と課題調査

—— Ba/Bbクラス分析を例にして (複数解答可) ——

表	〈質問項目と具体例〉 <sup>*(1)</sup>	Ba	Bb	全体・%	
		人	人	人	%
1	英語を観る学生の傾向				
	英語はもともと好きである	28	18	46	51.7
	英語はどちらかといえば嫌いなほうである	15	7	22	24.7
	どちらともいえない	26	10	36	40.4
	入試があるから英語を勉強した	48	28	76	85.4
	大学に入って、英語の必要性に芽生え勉強している	40	35	75	84.2
	英語は相変わらず嫌いである	8	7	15	16.8
2	学生にとっての英語の必要度				
	専門科目での文献を読むのに重要である	26	28	54	60.7
	大学院とか留学に必要なと思われる	12	6	18	20.2
	これからの時代の国際語として重要と思われる	42	34	76	85.4
	中国とか韓国とのアジア諸国との付き合いでも必要である	45	32	77	86.5
	STEP/TOEIC/TOEFLなどの資格試験のために重要である	36	25	61	68.5
	国際化時代の就職試験には、付加価値として必ず求められる	28	16	44	49.4
	高齢化と生涯学習の時代、いつでもどこでも必要となる	31	35	66	74.2
	小学生英語の登場の時代、さらに実践的な英語力が必要である	16	13	29	32.6
3	大学の英語授業に対する内容度				
	生きた英語はネイティブ教員から習いたい	22	19	41	46.1
	日本人教員の授業でも「話す/聴く」演習を取り上げてほしい	18	15	33	37.1
	ペアレッスンのような活気ある授業を希望する	25	21	46	51.7
	90分をバラエティーに富んだ、いろんな授業に分けてほしい	27	16	43	48.3

表	〈質問項目と具体例〉*(1)	Ba	Bb	全体・%	
		人	人	人	%
	能力別に、少人数の多目的なクラス構成を数クラス希望する	15	11	26	29.2
	CALL機器を利用した、e-ラーニング的な授業を望む	23	26	49	55.1
	精読クラスでの授業内容のスキル化をお願いしたい	14	7	21	23.6
	リメディアル的で興味のわくような授業を望む	12	5	17	19.1
	生涯学習の時代、社会人との活きた授業を考慮してほしい	7	6	13	14.6
4	君たちにとって望ましい英語教材				
	テキストの内容も幅広く、特定分野に偏らないでほしい	32	21	53	59.6
	マルチメディア時代、インターネット英語教材を希望する	21	23	44	49.4
	教員の専門分野に偏りすぎず、up-to-dateなものを希望する	25	14	39	43.8
	各学科の特性の基礎となるようなテキスト選定を希望する	27	13	40	44.9
	異文化体験と日本文化体験という比較対照的な教材を希望する	16	14	30	33.7
	環境/高齢化/介護/地域活動的な身近な内容の教材を希望	22	26	48	53.9
	英語検定/トピック/トフルなど資格取得の教材を希望	26	20	46	51.7
5	読解力をのばす授業に望む内容				
	講義(30分)+演習(60分)で大意要約の方式	15	10	25	28.1
	現在の社会情勢とか専門の教養分野の読解という現実的方式	38	30	68	76.4
	速読とか多読とか精読とかを混ぜてのオムニバス方式	35	28	63	70.8
	文法・語法遵守読みとか混ぜての読解方式	10	18	28	31.5
6	読解力向上に望むもの				
	Mainichi/Asahi Weeklyのような英字新聞を読める力を望む	32	28	60	67.4
	大学院の長文の読解が可能になる力をつけたい	8	13	21	23.6
	どんなものでも大意要約できる力をつけたい	21	15	36	40.4
	英語検定2級/トピック500点をクリアできる読解力	28	33	61	68.5
	キーワードなどでなんとか説明できる力をつけたい	36	30	66	74.2
7	作文力(口語・文語表現力)をのばす授業に望む内容				
	文法/語法/構文等を鍛え直し、表現力をつける方式	28	20	48	53.9
	基本語彙力1000を設定し、表現力をつける方式	37	27	74	83.1
	毎日英文日記をつけるのに、支障のない程度の力をつける方式	24	14	38	42.7
	インターネットの文章の要約を英文で表現する力をつける方式	22	18	40	44.9
	外国の教員と話ながら作文し、直接に添削を行なう方式	35	26	61	68.5
8	作文力向上に望むもの				
	どんな文章でも時間をかければ、表現できる作文力をつけたい	21	26	47	52.8
	どんな文章でもすみやかに表現できる作文力をつけたい	12	28	40	44.9
	観光英会話でケースバイケースの表現をこなしたい	36	20	56	62.9
	インターネットとか短い手紙の要約を英語で表現したい	22	21	43	48.3
9	聴解力をのばす授業に望む内容				
	教科書の付属ビデオテープとかテープで聴き取る方式	18	12	30	33.7
	英検/トピックなどの専門テープで聴き取る方式	41	31	72	80.9
	映画とか映画音楽(洋楽)を聴いて内容を理解する方式	28	14	42	47.2

表	〈質問項目と具体例〉*(1)	Ba	Bb	全体・%	
		人	人	人	%
	アジア(中国/韓国/フィリピン)の人々と話し聴取する方式	33	21	54	61.7
	ペアレッスンなどの共通話題で、種々の方策で聞き取る方式	28	18	46	51.7
10	聴解力向上に望むもの				
	英語検定準2級もしくは初級英会話の英語を聴きとりたい	25	16	41	46.1
	英語検定2級もしくは中級英会話を聴きとりたい	32	28	60	67.4
	英語放送(ABC/CNN)もしくは英語検定準1級を聴きとりたい	12	6	18	20.2
11	会話力をのばす授業に望む内容				
	外国人と直接話す練習をし、英語で考える習慣を身につける	28	19	47	52.8
	外国人同志の会話のビデオを視聴しながら、決まり表現の習得	16	13	29	32.6
	LL機器を使って、個人レッスン/ペアレッスンを行なう	22	16	38	42.7
	LL機器の自習モードで個人追加レッスンを行なう方式	25	18	43	48.3
12	会話力向上に望むもの				
	日常会話を普通にできるようにしたい	22	18	40	44.9
	アジアの中国人/韓国人/マレーシア人達と英語で話したい	28	23	51	57.3
	聴解力をつけて、トピック試験にチャレンジしたい	26	27	53	59.6
	専門分野の話題を英語で話したい	16	8	24	30.0
13	英語の授業の全般で希望する内容				
	成績評価に、優(80以上)の上に秀(90以上)の設定	10	12	22	24.7
	成績評価に、平常演習内容を重く加味してほしい	18	15	33	37.1
	会話クラスの定員は、現状40人から20人に是正してほしい	28	16	44	49.4
	CALLクラスの使用頻度が高く、自習モードで使用が不可能	27	16	43	48.3
	いろんな国の外国人と楽しく話したい	36	25	61	68.5
	DVD/LD教材を使った映像資料のクラスの設定を望む	26	12	38	42.7
	ディベートにより、いろんなテーマで話したい	8	7	15	16.9
	CALL教室で、いろんな国の映画会を行なってほしい	28	22	40	44.9

## V 調査結果と分析

### 【表1】：『英語を観る学生の傾向』

本学の学生は「入試」の存在と、「英語授業での目覚め」の2項目の数値が高い。本学の学生は「英語が苦手だから本学に入学した」との風評があったが、このデータで観るかぎり、そのようなマイナスイメージを払拭してもいいだろう。今後の取組みとして、「学生にどのように実用的な能力をつけさせるか」が、われわれ担当教員に課せられた大きな課題である。

### 【表2】：『学生にとっての必要度』

これからの国際化時代の各国共通言語およびコンピューター言語の「英語」の存在価

値を十分認識した結果が、この項目の分析となっている。学生には、「英語以外の外国語の習得は重要であるが、その習得と、その国の人との会話（意志疎通）とは別物である。それゆえコミュニケーションは、英語によってははかれる。その言語に精通するために、80%の言語環境が必要である」と話したことが、大いに影響しているかもしれない。

**【表3】：『大学の英語授業に対する内容度』**

大学の英語授業の現状認識と希望度が入り交じったデータのよう見受けられる。要するに「活気のある活きた授業」を望む学生群と、「ネイティブの教員による授業」群とに大別できる。学生は現状を前向きにとらえ、真剣に考えている傾向が観られる。「活きた授業」として、CALL教室の機器を利用した実用スキルを積む授業を望んでいる。「実用的・運用的」がKey Wordとなる。

**【表4】：『君たちにとって望ましい英語教材』**

「特定の分野に偏らないもの」「身近な情報を伝えるもの」「資格取得に利するもの」等が学生の希望するものである。教員の専門分野に偏りすぎるout-of-dateな教科書には人気はない。一般的で比較文化的な題材も、学生の眼にはold-fashioned的と映っている。今後はマルチメディア的な「今を多量に伝える」教材が主流を占めるであろう。

**【表5】：『読解力をのばす授業に望む内容』**

結論からいって、従来のオーソドックスな教材に頼った授業には、学生の関心のなさが如実に示されている。90分をカラフルに、多目的に活用する授業を切望する学生の姿が明確に示されている。「オムニバス」、「教養+専門」の組合せの発想に、学生の弾力的なチャレンジ精神を見て取ることができる。

**【表6】：『読解力向上に望む内容』**

「学生たちの現実的な物事処理感覚」を、データから読みとることができる。例えば、英字新聞（Mainichi Weekly）読解要約とか、トピック500点などのクリアなどは決して不可能な目的ではなく、むしろ好ましくポジティブな姿勢でとらえている。その反面、学生の選択数値には、じっくりと英文と取り組む姿勢から逃避している面があらわれている。

**【表7】：『作文力をのばす授業に望む内容』**

「基本語1000」とか「外人による直接添削」など、とても前向きで、その対応が具体的である。今後の予想として、「インターネット言語の和訳」のような要望が多くなると想像できる。「英文日記スタイル」のように、毎日こつこつ継続して日記を書きつけるスタイルに拒否感が強いのは、現代学生気質そのものである。

**【表8】：『作文力向上に望むもの』**

「時間をかけての表現力」とか「ケースバイケースの英会話」など、完璧さを求めつつも現実的な事態に対応する学生像は、他の分野に比べデータ値はあまり高くない。彼らなりに自分たちの英語力に対して、厳しい評価を下している。作文力に対して、学生の自信のなさがこのような低い数値として表れている。これまでの「読解力」「作文力」の向上に関するデータ値の最高値の低さは、日本人特有のアキレス腱に相当する数値である。

**【表9】：『聴解力をのばす授業に望む内容』**

ヒアリングをのばす方針は、直接に資格英語のテキストのテープ聴取方法とか、アジアの人と直接に話し合っただけで聴解力をつけるとかに、少かに高い数値が観られる。外国人の中でも、英語を母国語にしていない外国人との対話から聴解力を習得するメソッドは、現実的対応であり、「アジア」の発想は誠に驚きに値する項目である。教科書のテープは、相対的に録音に十分な配慮がなされていないのが現状である。即ち、①スピーキングのスピードが早すぎる、②センテンス間の間が短かすぎる、③スピーキングのグレードが高すぎる、などである。学生の聴取能力に応じたグレード別テープ教材の開発を指摘しなければならない。

**【表10】：『聴解力向上に望むもの』**

学生の能力からして、その6割は英語検定準2級程度ならクリアしているはずである。それなのにデータ的にはかなり低い数値となっている。受験料は高いので、学生の本音は実社会で認められる2級受験となっている。そのため、英検にするかトイックするかで迷う学生が多いのも実情である。その分岐点は聴解力の善し悪しにかかっている。聴解力に秀れている学生は英検で「資格」を取り、それから、トイックで「認定基準点」を取る傾向が見られる。

**【表11】：『会話力をのばす授業に望む内容』**

「直接外国人と話す練習」が低い数値ながら、他のデータより僅かに上位を占めている。「聴き・話す」ことに、もう少し高い数値が出なかったことは、今後の検討課題である。【表9】の聴解力で、外人と話す項目には、思いの外、高い数値が出ていたが、会話には「控え目」的な日本人の特性が感じられる。

ネイティブの専任が一人であり、さらに外国人留学生在が皆無に近い学園生活の状態での、この数値は、思いのほか上等であるかもしれない。

ただ、「LL機器の自習モード使用希望者」は結構多い。聴いて話す希望学生の数値で判断できうる状態であるが、CALL教室はいつも満杯状態である。その使用状態の過密さと、今後の機器使用状況を鑑みた場合に、第2CALL教室の至急の増設を強く望むものである。

**【表12】：『会話力向上に望むもの』**

「日常会話」が上位にくるのがベストであるが残念である。本学は史学科／文化財学科を擁するために、「アジアの人と英語で」が上位にきている。会話中心の授業内容について、学科の実態にあわせた異なったテキストの採用検討も考慮しなければならない。「読む・書く・聴く・話す」の分野で、「トピック」表記は、今の世界情勢を映している。就職決定後の海外赴任の状況が現実味を帯びてきていることを、学生達は肌身で知っているからであろう。

**【表13】：『英語授業の全般で希望する内容』**

数値は低いながら、「成績評価における評価（秀）の新設」は、学生その他大学の情報によって設定できたものである。「演習内容の平常時評価重視」は、英語自体が演習科目のため当然すぎることであり、教育指導のさらなる研鑽を行なわねばならない。また少人数クラスの達成は、早急に善処しなければならない事柄である。

「DVD/LD」のクラスは前期 Semester で実施し、好評をえた実績がある。しかし映画会ともなると、映像肖像権の問題とも絡み検討課題となる。

## V まとめと課題提起

「大学の英語授業における学生実態調査」の結果と分析から、数々の課題提起が生まれてくる。ここにそれを考察した結果を報告して本編のまとめとする。

**【課題提起】**

1. 本学の学生の中には、『語学学習が特別に苦手だから、教科内で特に重点化されてない奈良大学を受験対象校に選択した』と、入学の動機づけに挙げている学生もいる。しかしながら入学後、選択した学科にもよるが、国際社会情勢とか英語科の学習指導後、学生実態調査結果が示すように「やるき」をみせている。
2. 4技能とも、当初危惧したほどに低い数値がでなかった。学生の能力は決して低くなく、技能面での適切な指導によって、数値向上を期待できる。さらに言えることは、「従来のな読む。話す。訳す」では学生のモチベーションを喚起できないことが確かになった。学生実態に合わせた独自の教授法が急務である。
3. 学生たちは、国際化の時代の申し子として、時代の流れに敏感である。我々教員も日々研鑽を必要とする。
4. 英語に限らず語学授業全般であるが、授業は90分の演習形態の多様化を学生たちは望んでいる。言い換えれば、学生の集中力は、ますます乏しくなっており、「30分3パターン」の教授・授業形態を学生は望んでいる。
5. 英語の重要性は自覚しているが、Listening/Speaking面での自信のなさが、語学能力のいま一層の進歩を阻んでいる。いろんなデータがそれを如実に示している。教員側の指導方針

の徹底と学習指導の調査研究と対策が求められる。

次に私見であるが、実現したい授業として、次の事柄を申し述べる。

授業で直面する問題点として、「基礎学力の低下・コミュニケーション能力不足・発表と質問の少なさ」が挙げられる。必然的に、学生に対する個人指導が思うように任せられない事態が早晩やってくることは確実である。

実現したい授業とは、「教える授業」から「主体的学習環境のある授業」に結論づけたい。具体的には、次の5点を列挙しておきたい。

- (1) 事前・事後学習の保障
- (2) インタラクティブな授業の継続
- (3) 視聴覚教材を利用したの、動機づけセミナーの実施
- (4) 授業をオープン化して、社会の意見を取り入れるカリキュラム創り
- (5) 海外および国内大学との交換留学生の実施と海外語研修体制の確立

最後に、学生側の学生実態分析と教員側の教授実態分析を重ね合わせた結果、「注-2」で詳述している如く、私が提案した私案が奈良大学教養部の「英語教育・新カリキュラム案」として大筋で認められた。教養部案として採択されたのである。

## 注

1. 本稿の「学生実態調査分析ストラテジー」については、Research on Students' Preferences for College English Learning: The Case of HSUH (大学教育学会誌 第19巻 第2号 1997年11月)を参考にさせていただいた。
2. 本編の「要旨」にて説明したように、本学教養部では平成13年9月から平成14年3月まで、『英語教育将来検討委員会』が設置された。「抜本的な外国語教育の在り方—英語教育」が毎回延々と熱心に協議され、下記のような山田案(折込み)が教養部会で承認された。(平成14年3月19日、教養部会にて)

教養部・英語教育将来検討委員会「新カリキュラム」

2002年3月13日

教養部・学部間共通科目設定					
英語Ⅰab	英語Ⅱab	英語Ⅲab	英語Ⅳab	英語Ⅴa・b/a・a'	NC英語ab
(教養英語)	(コミュニケーション英語)	(応用英語・Ⅰ)	(応用英語・Ⅱ)	(異文化理解)	(現代英語)
(必修・2単位)	(必修・2単位)	(選択必修・2単位)	(自由選択・2単位)	(自由選択・半期2単位制)	(必修)
(学科別一部能力別)	(分野別能力)	(分野別能力)	(分野別能力)	(a・a'前・後期同一カリ)	
(自己申告)	(自己申告)	(自己申告・一部セレクション)	(自己申告・一部セレクション)	(自己申告・一部セレクション)	(自己申告・登録制)
(1年次対応)	(1年次対応)	(2年次以上)	(2年次以上)	(3年次以上)	(2年次以上)
(社会人対応)	(社会人対応)	(社会人対応)	(社会人対応)	(社会人対応)	(社会人対応)

【比較概念】を中心に。	標準英会話⑤ (セレクション)	中級英会話⑥ (セレクション)	中級英会話	上級英会話	観光英会話	
<以下、参考例> 国文学科 文学・文化 史学科 古・近歴史 地理学科 地域・共生 文化財学科 考古・遺産 社会学部 心理・福祉 国際・情報 (参考) 自然・科学 中国・日本 世界・寧楽	AA: (1) 【英検 2級・海外経験 2年以上】 【TOEIC 450】 A: (1) B: (6) (7) SRA会話	AA (1) 【英検 2・準 1級】 【TOEIC 500↓】 A (1) B (2) (2) SRA会話	【TOEIC 500前後】 中級TOEIC 【500前後】	【英検 準 1級】 【TOEIC 500以上】 上級TOEIC 【550以上】		
		CALL英会話③ A (1) B (2)			基礎英語	
		LL英会話④ A (2) テキスト難 B (2) テキスト易	中級TOEIC③ A (1) 500以上 B (2) 500未満 中級STEP① 2級～準 1級	英語演習 (教職英語) 時事英語セミナー (表現英語)	英語特講 (上場企業向) (大学院対策)	ビジネス英語
		標準TOEIC③ A (1) 400以上 B (2) 400未満	インターネットE② カレントEng.③ Newspaper E Magazine E		異文化 コミュニケーション 寧楽を読む 万葉集を詠む 飛鳥を観る 奈良町を識る	メディア英語
<16>	<22>	<18>	<4>	<4>	<4>	

【現行クラス】

<1年次> 英語Ⅰ 17 英語Ⅱ 17  
 <2年次> 英語Ⅲ 21 NR英語 3  
 <3・4年次> 計= <58>

【改訂クラス】

英語Ⅰ:16 英語Ⅱ:22  
 英語Ⅲ:18 英語Ⅳ:4 NC英語:4  
 英語Ⅴ(異文化理解):4

計= (68)

【要望】◎評価を4段階→5段階に改善。GPA制度の導入 (A=4/B=3/C=2/D=1/F=0)

◎資格優遇制度の導入。

## 英語教育 新カリキュラム案

平成14年3月19日（火）

（英語教育検討委員会）

### 基本的な考え方

- ◇全学生に基礎的な英語力の涵養を期す、とともに、能力のある学生についてはその英語力の向上がどこまでも図れることを期す。
- ◇そのために能力別クラス編成を導入する。
- ◇コミュニケーション能力、表現力の向上を中心に、幾つかのコースを設定する。
- ◇高能力クラスになるほど受講学生数は減少すると予想されるが、小人数クラス（極端な場合、最高トップレベルは受講生が1人ということもあるかもしれない）の存在を当局は許容されたい。
- ◇能力別編成に伴い、クラス数がある程度（10クラス程）増えるが、非常勤講師等の措置を、本学生の英語力向上のために、同じく許容されたい。

### 具体的事項（cf. 別紙一覧表）

- ◇単位：現行通り、英語一回生4単位必修、二回生2単位選択必修。独・仏・中も同じ。  
他に、自由選択として8単位、語学総計18単位まで取得可能。
- ◇英語Ⅰ、英語Ⅱは一回生必修。
- ◇英語Ⅰは「教養英語」であって、分野の特徴を持つ「学科別編成」とし、その中に2～3段階のグレード制を敷く。グレードの選択は入学時の学生の自己申告とする。
- ◇英語Ⅱは「コミュニケーション英語」であって、会話、ToEICを中心に2～3段階の能力別クラス編成を敷く。グレードの選択は入学時の学生の自己申告とする。英語科教員が設定する何らかの基準（ex. 入試成績、TOEIC、TOEFL、英検の成績、帰国子女等による）をクリアしている学生は、英語Ⅱを飛び越えて英語Ⅲに進んでもよい。その場合、英語Ⅱの単位は取得したものと認める。
- ◇英語Ⅲは「応用英語」であって、能力別クラス編成による二回生以上の選択必修。中級程度の英語力を狙いとするが、コミュニケーション英語の他に、インターネット利用、読解、速読等のコースも設置される。クラスの選択は、何らかの基準で教員側から勧告する形のセレクションと、学生の自己申告によって行う。  
◇英語Ⅳは、中級程度の力ではあるが、英語Ⅲ同等のレベルで更にトレーニングを重ねたい学生のためにとくに設定するものである。
- ◇英語Ⅴは「異文化理解英語」として、三回生以上を対象に、能力別で英語の総合力を高め、上級以上の英語力と養成を狙いとする。履修は自由であるが、クラス編成は教師によるセレクションと学生の自己申告による。単位はリミットの範囲内で幾らでも加算できる。
- ◇これらのクラスは前期、後期を通じて設置されているが、学期毎のクラス移動は可能とする。

### 要望事項

- ◆三・四回生の外国語受講を容易にするために、英語Ⅳ（応用外国語）については、英語の総合的なスキルに加えて、英語文化等に関わるレクチャーも取り入れた内容とし、半期2単位をこれに与えるようにしたい。それを通して英語力の更なる向上を図るものとするが、それについては教養部だけでは決められないので、次期学部長が両学部、教務部、他関係当局と折衝されたい。また教養部内の合意も必要であろう。
- ◆上記のような半期2単位制を取り入れた場合、語学の総単位数制限18単位を22単位程度に改訂することもありうる。
- ◆三・四回生の英語（英語Ⅴに当たる）を両学部の共通選択科目の中に入れてもらいたいということは、既に両学部長に繰り返し要請し、理解は得ている。

### 参考資料

1. 大学英語教育学会：関西支部紀要 第5号、1999
2. 大学英語教育学会：創立40周年記念誌、2002
3. 外国語教育メディア学会：第42回全国研究大会誌、2002
4. 大学英語教育学会：新時代の英語教員養成－現状と展望－、2000
5. 山田 隆敏：“メディア環境における外国語教育”奈良大学総合研究所所報 第8号、2000

### Summary

Learning strategies are steps taken by students to enhance their own learning. Strategies are especially important for language learning because they are tools for active, self-directed involvement, which is essential for developing communicative competence.

The purpose of this paper is to make an extensive needs analysis survey of Nara University students. In the survey, careful attention was paid to the significance and necessity of needs analysis study.